船岡山遺跡発掘調査概要

1980

和歌山県教育委員会

例　　言

1．本書は、和歌山県が建設省近畿地方建設局より委託を受けて実施した昭和54年度船岡山遺跡発掘調査の概要報告である。

2．本発掘調査に要した経費12,000千円はすべて建設省近畿地方建設局が負担した。

3．発掘調査は、和歌山県教育委員会の指導のもとに社団法人和歌山県文化財研究会が和歌山県より委託を受け事業を実施した。

4．発掘調査は、和歌山県教育委員会文化財課技師松田正昭、社団法人和歌山県文化財研究会技術員富加見泰彦、同渋谷高秀を担当者として実施し、和歌山県文化財保護審議会　小野山節、羯磨正信、巽　三郎、藤澤一夫各委員からは随時現地において指導を受けた。

　また、奈良国立文化財研究所　菅原正明技官、高槻市立埋蔵文化財調査センター富成哲也、同橋本久和の各氏からは、現地において助言を得た。

5．調査にあたって建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所、同かつらぎ出張所、かつらぎ町教育委員会から種々配慮をうけた。

6．本書の図版に使用した航空写真は、パシフィック航業株式会社、株式会社大阪写真測量所において撮影されたものの提供をうけた。

7．出土遺物の整理、図面作成にあたって奈良大学生土井孝之君の援助をうけた。

8．本書の作成は、調査担当者が分担し作成したものを松田が編集した。

9．本発掘調査事業の調査組織は次のとおりである。

和歌山県文化財保護審議会

委員　小野山　　節　　委員　羯　磨　正　信

委員　巽　　三　郎　　委員　藤　澤　一　夫

和歌山県教育委員会事務局

教育長　　高　橋　正　司

教育次長　　三　宅　秀　彦（兼、社団法人和歌山県文化財研究会常務理事）

文化財課

課　　長　　井　上　　至（　　〃　　〃　　）

主　　幹　　山　田　義　男（　　〃　　事務局次長）

文化財第二係長　桃野真晃（　〃　〃　幹事）
技　師　松田正昭（　〃　技術員）
主　事　田尻佳敬（　〃　書　記）

社団法人和歌山県文化財研究会事務局

事務局長　海野正幸
技術員　富加見泰彦　渋谷高秀
書　記　戸口郁英　平松佐知子
嘱　託　道本久美

目　　次

1．調査に至る経緯と経過 …… 1
2．調　査　の　方　法 …… 1
3．位　置　と　環　境 …… 1
4．調　査　の　概　要 …… 3
5．出　土　遺　物 …… 5
6．結　　語 …… 6

挿図目次

第１図　トレンチ配置図
第２図　土拡墓実測図
第３図　配石遺構実測図
第４図　出土遺物実測図

図版目次

PL 1　船岡山遺跡位置図
PL 2　西拡張区遺構配置図
PL 3　調査地区土層図
PL 4　出土遺物実測図
PL 5　出土遺物実測図
PL 6　船岡山遺跡航空写真
PL 7　船岡山遺跡周辺航空写真
PL 8　船岡山遺跡遠景写真
PL 9　発掘調査状況写真
PL 10　西拡張区
PL 11　出土遺物
PL 12　出土遺物
PL 13　出土遺物

1．調査の経緯と経過

建設省近畿地方建設局は、かつらぎ町渋田の妹山麓の紀の川南岸と中島・船岡山間の狭隘部を開削し、流路拡幅のうえ護岸、築堤工事を改修計画の一環としてもっていたが、掘削の対象とされた船岡山には、弥生時代の遺跡である船岡山遺跡が周知されていたため近畿地方建設局和歌山工事々務所とその取り扱いについて協議を進めた。

協議の結果、船岡山遺跡は昭和25年に金谷克己氏等によって小規模な調査が行なわれたのみで、その範囲等については不分明であるので昭和54年度において遺跡の範囲、内容等を確認するための調査を実施することとし、その調査結果に基づき次年度以降の取り扱いを再度協議することになった。

調査は、建設省が掘削を予定している部分全域を対象とし、幅員２ｍの試掘溝を設定しそれぞれについて調査状況写真、土層断面図等を作成した。

調査途上、大雨による紀の川増水のため船岡山へ渡る唯一の橋の流失が一再ならずおこり、調査の遅延が心配されたが、当初予定の試掘調査が見込みより早期に終了することが確実になったため、近畿地方建設局和歌山工事々務所と昭和55年１月31日付けで事業計画変更の協議を行ない２月中旬より西端部約500㎡の全面発掘調査を実施し、３月25日に本年度の事業を完了した。　（松田）

2．調　査　の　方　法

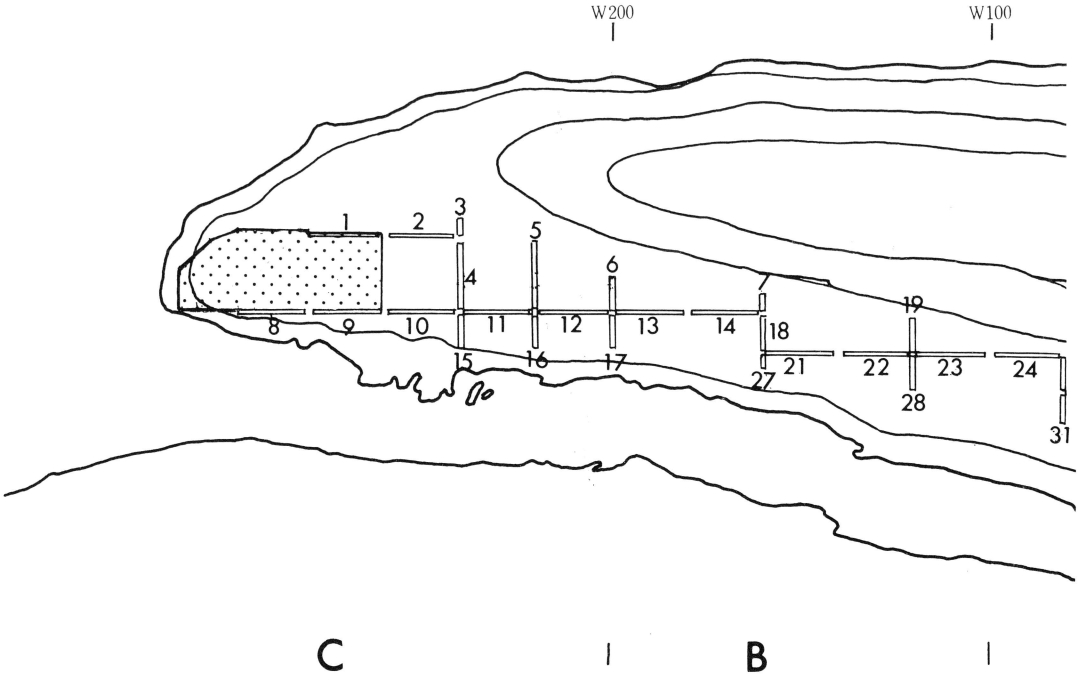
調査の対象は、建設省近畿地方建設局が紀の川の流路拡幅のために削平を予定している船岡山南半部の幅員(南北)20～30m、延長(東西)約500ｍの緩傾斜面である。本年度は遺跡の範囲、内容を確認するため削平予定地内に幅員２ｍ、長さ20m(南北方向の試掘溝は､地勢からこれより短かい。)の試掘溝を設定し調査を実施した。

調査地区の地区割は、基準線を島の高所に鎮座する厳島神社に到る階段の側縁に求め、この延長線上に原点を設けた。原点より東はＥ、西はW、南はＳ、北はＮを冠し、これに原点からの距離で地点を表示した。また、地区名は０～W100をＡ区、W100～W200をＢ区、W200～300をＣ区、０～Ｅ100をＤ区、Ｅ100以東をＥ区とした。

発掘調査は、遺構を確認した場合はその検出面で調査を止め実測図、写真撮影を行ない、確認されない場合は地山面までの掘り下げを行なった。各試掘溝については、土層断面図、写真を作成した。（冨加見）

3．位　置　と　環　境

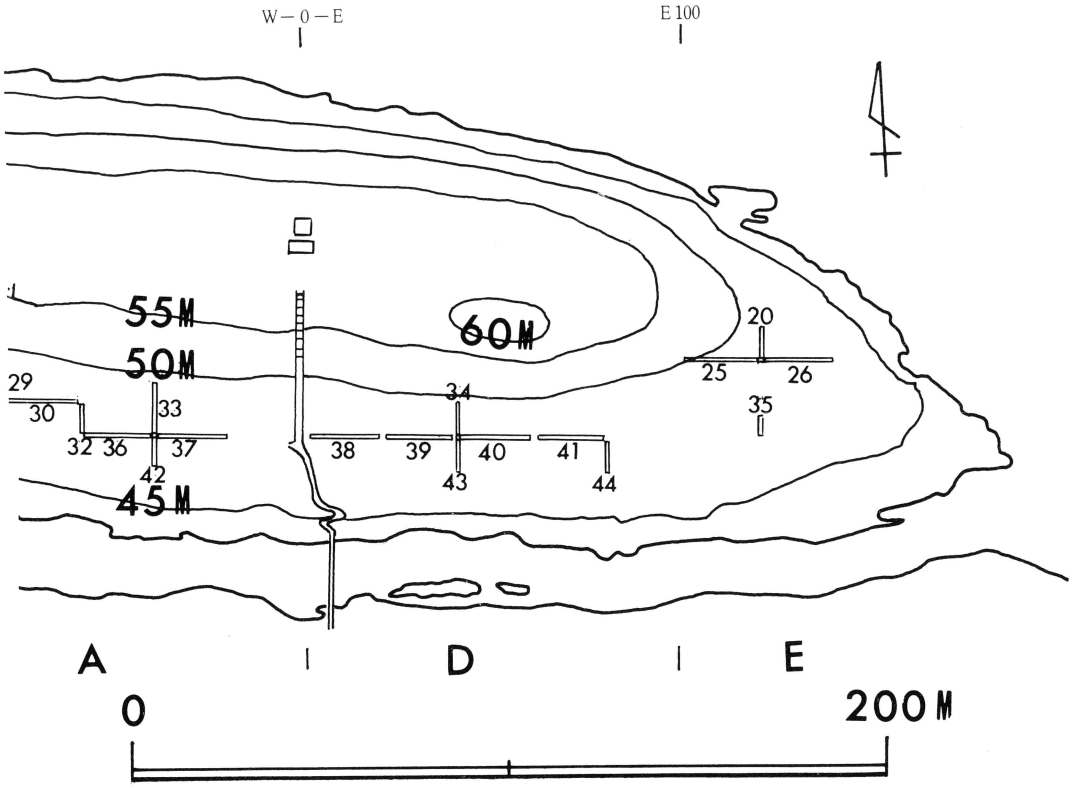
奈良県大台山系に源を発する吉野川は、県境を越えるとその名を紀の川と改め蛇行をくり返しな



がら西流し和歌山県伊都郡かつらぎ町西端に到り河幅をいっきょに減じている。この紀の川の河幅が狭まったところ中島・船岡山が位置し、その南岸に妹山が、その北岸に背（兄）山が対峙している。古来より景勝の地として知られ『萬葉集』をはじめとしてその後の多くの和歌集にこの地を詠んだものがおさめられており、また、浄瑠璃「妹背山婦女庭訓」により遍く知られているところである。

船岡山は東西500ｍ、南北120ｍの梭状の島で、南側は緩傾斜の幅20～30mの平坦部が広がり、これに続く南斜面は河原石の石垣による畑が頂上部付近までつくられているが、東半は岩盤の露頭がみられるのと、厳島神社が祀られていることもあってここから北斜面は雑木林となっている。南側平坦部と頂上部との比高は13～14mあり、また島の四周は断崖状になっている。南岸とは30mしか離れておらず妹山北麓とはかつて地続きであったことをうかがわせる。北岸とは紀の川主流をはさんで約80mの距離があり、現在は麓に人家の密集した背山を望むことができる。

つぎに周辺の遺跡についてみると、遺跡の数は少なく南岸では弥生時代の渋田遺跡と古墳時代の西渋田１号墳があるのみである。西渋田１号墳は、本遺跡調査中の昭和55年　月密柑畑の耕作中に発見された箱式石棺を主体部とするもので直刀一口が副葬され、人骨が遺存していた。北岸に眼をうつすと縄文時代では移遺跡、弥生時代では佐野、笠田Ⅱ、萩原の各遺跡が知られている。このうち調査が行なわれているのは、奈良時代前期の佐野廃寺跡下層の佐野遺跡と萩原遺跡である。萩原遺跡では中期の壺棺墓１基が検出されただけであるが、佐野遺跡では後期の竪穴式住居址９棟、古



第 1 図　トレンチ配置図

墳時代のもの１棟がみつかっている。

佐野廃寺は、法起寺式の伽藍配置をもち、塔、金堂、経蔵等が確認されており、『日本霊異記』にみえる「伊都郡桑原の狭屋寺」との関連を推定させる寺院跡である。萩原遺跡は、弘仁３年(812)以前の南海道萩原駅家跡推定地として昭和53年度に発掘調査が行なわれたが、前述の壺棺墓と室町時代頃の掘立柱建物等を検出しただけであった。しかし、この付近一帯が、神護寺領桙田庄の庄域にあたることは、地元萩原に鎮座する宝来山神社と神護寺に所蔵されている絵図から明らかなことから、庄園との関連を考えることができる。この他には瓦、瓦器等の出土で知られる笠田Ⅰ遺跡、笠田墳墓等の鎌倉時代の遺跡があるが、調査が行なわれていないため不明の部分が多い。以上にみられる北岸にある遺跡は、いずれも標高50～60mの段丘上に位置していることが特徴的である。

（松田）

4．調　査　の　概　要

1）　層　　序

調査地区は東西に約 500 m と長く、それに比して南北は20～30m と細長く、標高は45m～50mをはかる。一見平坦に見えるが、北から南へ緩やかな傾斜をもっている。現在、船岡山は島となっているが、地形からみて往時南岸妹山とは地続きであった可能性が大きく、今回調査の

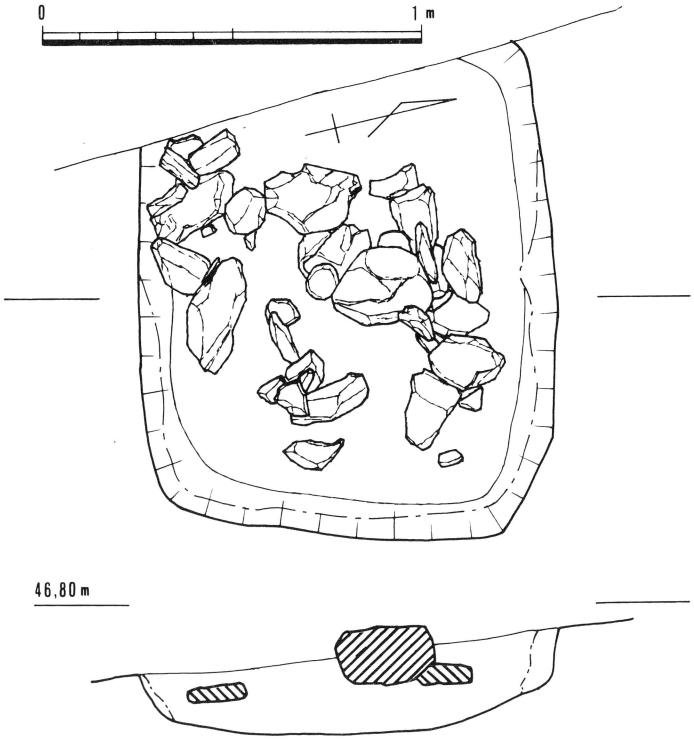
対象となった部分が谷状になっていたと考えられる。これは岩盤の状況とも一致している。

層序は、場所によって異なり現在の地表から地山面まで２～５層に分けることができ、特に東端部では紀の川が運んできた砂層が顕著となる。ＰＬ３は層序を模式的に表示したものであるが、中世の遺物を包含する淡茶褐色包含層はW180～250の間約70mに限って認められるものである。弥生式土器を包含する黄灰色砂質土は調査地区の西半部のほゞ全域に認められるもので最も広がりをもつものである。　同じく弥生式土器を包含する暗茶褐色砂質土は、W180 ～W240の間約60mに認められるもので中世の包含層とほゞ重なり合うところから、かつてこの部分が浅い落ち込みを形成していたとも考えられる。

2）　遺　　構

試掘溝で検出した土壙墓、配石遺構及び西端拡張区で検出した竪穴式住居址、掘立柱建物がある。

◉土壙墓（第２図）第４トレンチで検出したもので、北から南へ下がる傾斜面につくられた1.1m×1.3m以上、深さ0.2mをはかる。壁周に焼土が認められ、壙内には礫が多数込っていた。副葬品は認められなかったが、中世の遺物包含層を切り込んでおり中世末から近世初めのものと考えられる。



第２図　土壙墓実測図（第４トレンチ）

第３図　配石遺構実測図
（第17トレンチ）

◉配石遺構（第３図）第17トレンチで検出したもので、明瞭な掘り方は検出できなかったが、緑色片岩の上に土師器の羽釜（第４図１）が置かれていた。中世の墓地と何らかの関係をもつものとも考えられる。

◉竪穴式住居址（ＳＢ１）（ＰＬ２）径約９ｍをはかる円形の住居址であるが、更に発見が予想されるため調査は来年度に行なうことにした。

◉掘立柱建物（ＳＢ101～ＳＢ105）（ＰＬ２）ＳＢ101は２間×４間の南北棟をもつ建物で今回の調査で検出したもののうち最も大きなものである。ＳＢ102は２間×２間の建物で、ＳＢ104と棟方向が同じである。ＳＢ103、105は１間×１間の北西ー南東の棟をもつ建物である。ＳＢ104は１間×１間に廂がつくものでＳＢ102と関係をもつものと考えられる。 いずれの柱の掘方も20cm前後で、覆土中より弥生式土器を検出しているが、現在のところ時期を決めることはできない。

５．出　土　遺　物

調査地区のほゞ全域から弥生式土器が出土し、Ｂ、Ｃ両地区からは限られた範囲内で中世の遺物包含層があり、羽釜、瓦器椀等が出土している。

弥生式土器　器種としては、甕、壺、甑、高杯、鉢、蓋、小型の手捏ね土器、紡錘車等がある。いずれの器種にも若干の砂粒（石英、長石等）を含み、胎土は比較的精選されており、焼成も良好なものが多い。時期的には畿内第Ⅳ～第Ⅴ様式に位置するものである。

●甕（１～10）口縁部の形状から２種に分類できる。口縁部が「く」の字形に外反するもの（１～３）と「く」の字形に外反し、端部を上方へつまみ出したもの（４～６）である。前者は頚部内面に指頭による調整痕が認められる。体部は叩き目をもつもの（１．２．４）とヘラ磨きを施したと思われるもの（３）とがある。底部は上げ底状のもの（７～９）と平底のもの（10）とがある。

●甑（11.12）　いずれも焼成前に穿孔が行なわれたもので、(11)は叩き目が施されている。

●壺（13～27）　口縁部の形状によって７種に分類できる。

(1)　口縁部が「く」の字に外反するもの（13）。

(2)　凹線文をもつもの（14.15）。

(3)　無文のもの（16）。

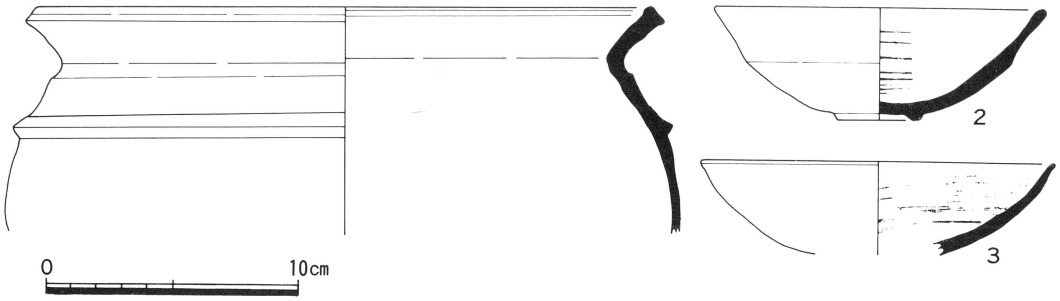
(4)　刺突文及び篦描き文様をもつもの（17）。

(5)　垂下させた口縁部に竹管文を施したもの（18.19）。

(6)　凹線文及び円形浮文を施した、もの（20）。

(7)　直口する口縁部に４段の竹管文を施したもの（21）。

体部はヘラ磨きによる調整が行なわれ、内面はヘラ削りによる調整のもの（22.23)と刷毛目調整



第 4 図　出 土 遺 物

のもの（24.25）がある。 底部はすべて平底である。この他台付壺（26.27）がある。

●高杯（28～34）(28)、(29) はゆるやかに外反する口縁部をもつ杯部の破片である。(30) は口縁部を欠くが、脚部は中空で杯部との接合は円板を充填している。脚部は裾部が大きく広がるもの（31）と比較的太くあまり広がらないもの（32）や、三段の透孔をもつもの（33）さらに円筒状のもの（34）がある。

●台付鉢（35.36） いずれも鉢部を欠いているが、低い脚をもっている。外面は丁寧なヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りが行なわれている。

●蓋（37） 頂端は直径3.6㎝をはかり中央部は凹んでいる。外面は丁寧なヘラ磨きが施され、内面はヘラ削りによって調整されている。

●小型土器（38） 器高５㎝をはかり台が付くものである。

●紡錘車（39） 甕の体部を利用した5.6㎝×5.1㎝をはかるものである。

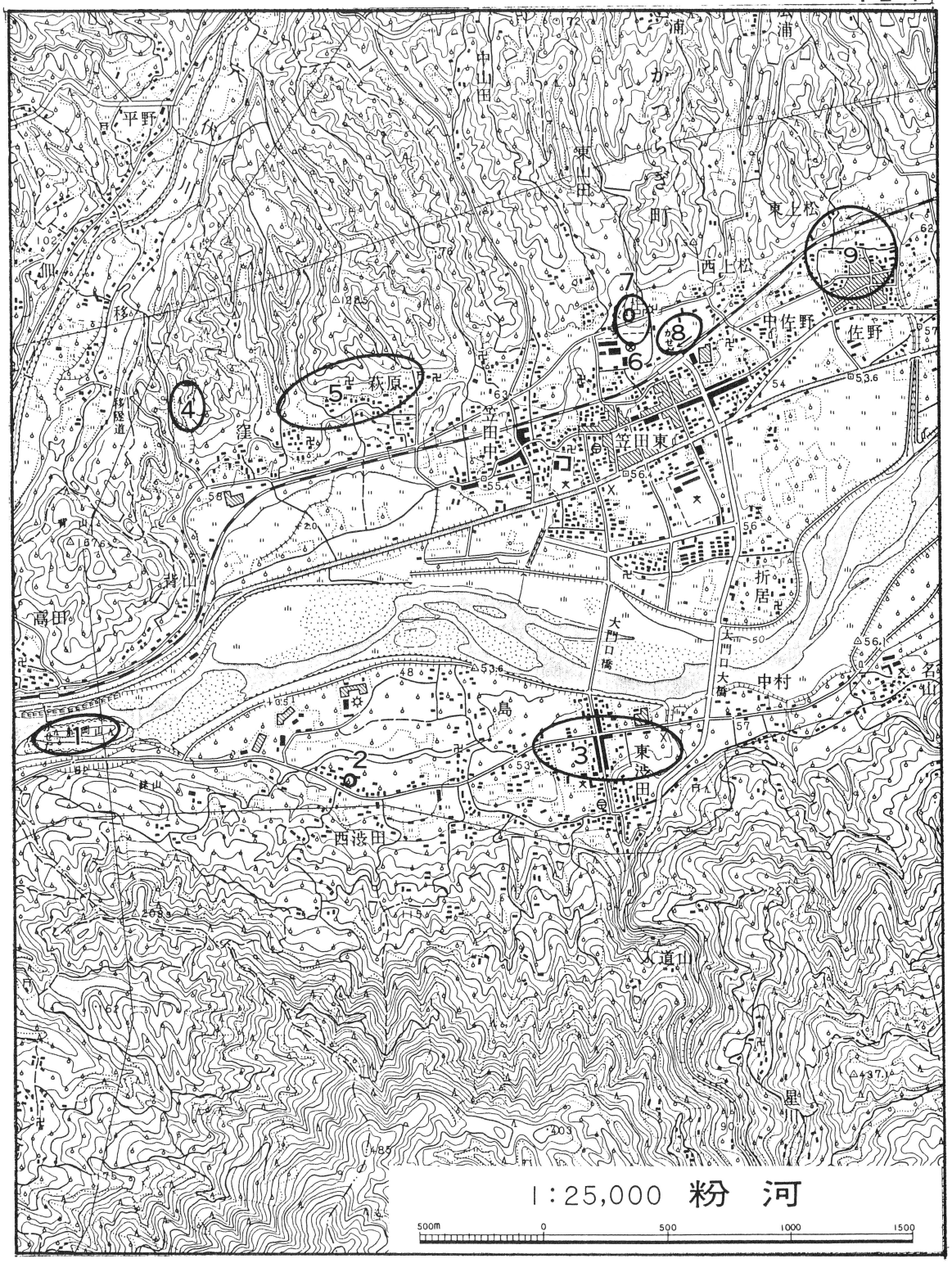
土師器　羽釜（１）は配石遺構から出土したもので体部下半を欠いているが、口径約25㎝をはかる。鍔部は断面三角形で小さくつけている。体部外面に煤の付着がみられる。

瓦器　椀（２.３）はいずれも包含層から出土したもので、器壁は厚く、ともに太い暗文が認められる。(冨加見)

６．結　　語

船岡山遺跡は、昭和25年５月笠田高等学校の生徒が船岡山の開懇地において土器片を採集したことから同年夏に当時、国学院大学に奉職されていた金谷克己氏と笠田高等学校郷土研究部の生徒等によって小規模な発掘調査が行なわれた弥生時代の遺跡であることが明らかにされた。島の一部は開墾され柑橘、柿畑にされ現在に至っていたが、建設省近畿地方建設局は紀の川治水対策の一環としてこの船岡山の一部を削平することになり、30年後に再び発掘調査を実施することになった。

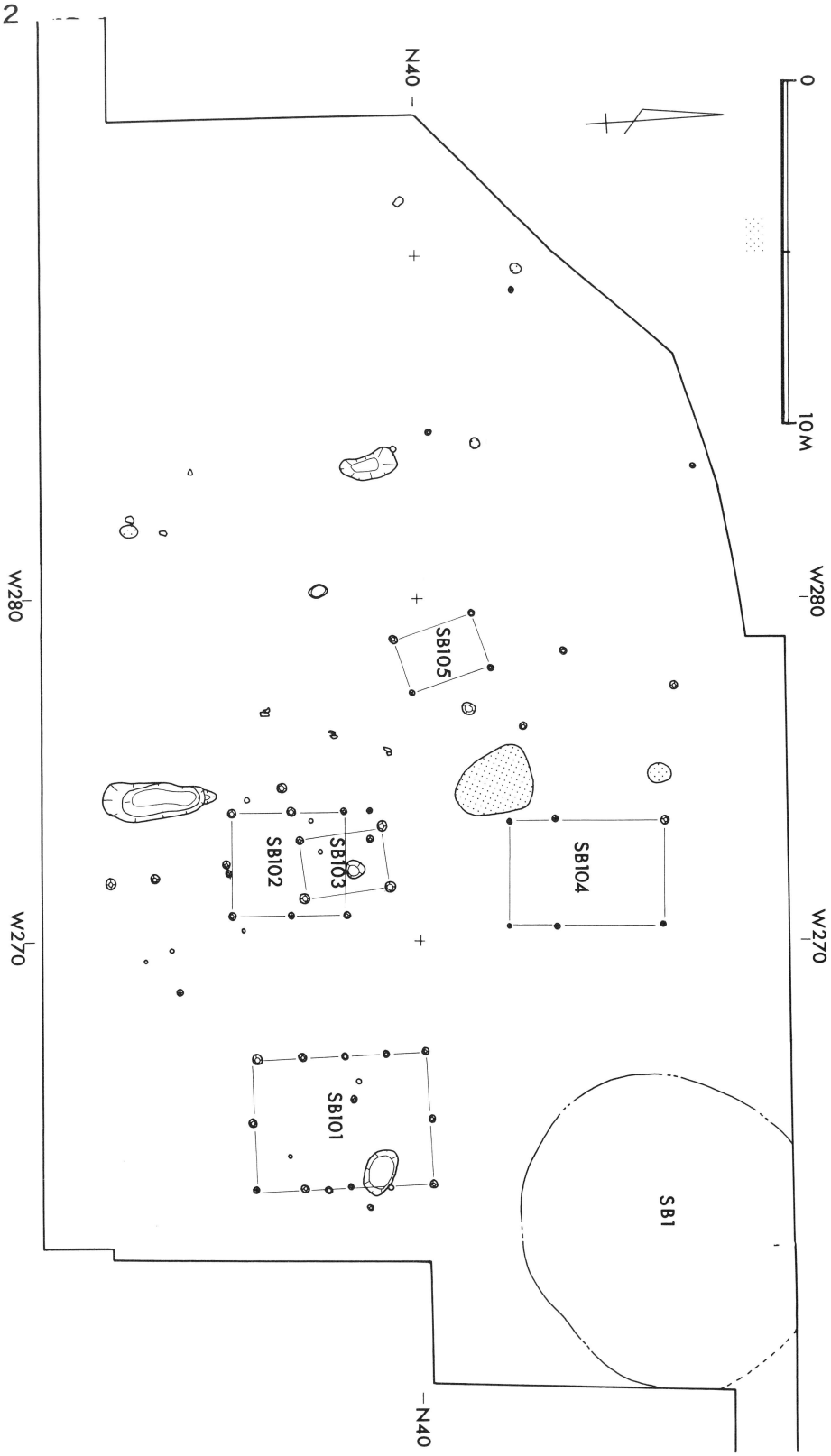
本年度の調査は、削平予定地全域を対象とし、遺跡の範囲、内容を確認することであったが、一部拡張した結果竪穴式住居址、掘立柱建物等が検出されたことから、全面発掘調査を実施する必要がある。　(松田)



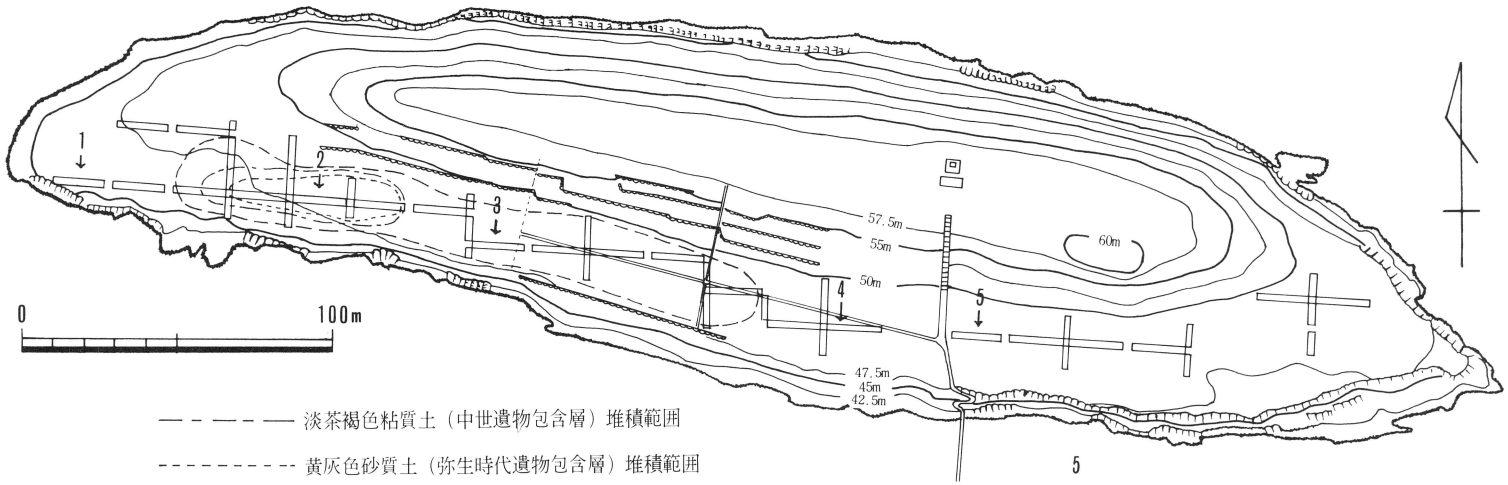
1．船岡山遺跡　2．西渋田１号墳　3．渋田遺跡　4．移遺跡
5．萩原遺跡　6．笠田Ⅰ遺跡　7．笠田遺墳墓　8．佐野廃寺.佐野遺跡

船岡山遺跡　位置図

PL 2



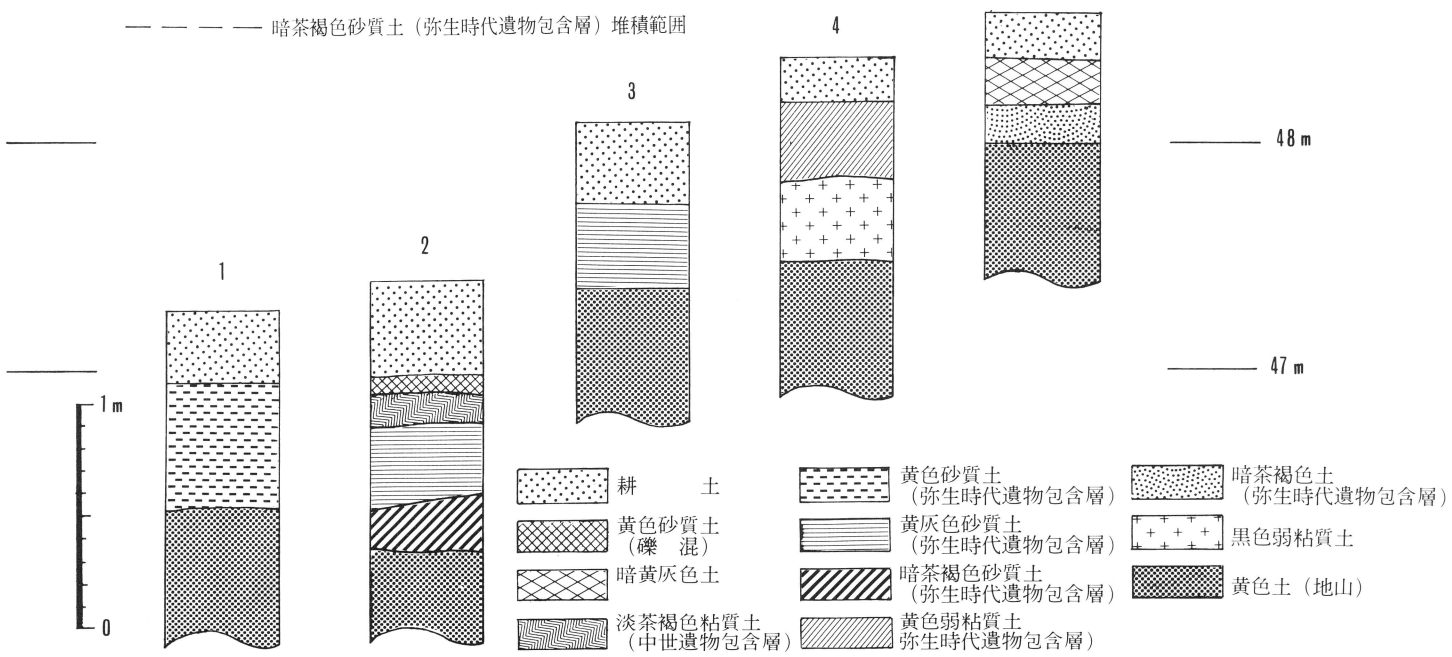
西拡張区遺構配置図



淡茶褐色粘質土（中世遺物包含層）堆積範囲

黄灰色砂質土（弥生時代遺物包含層）堆積範囲

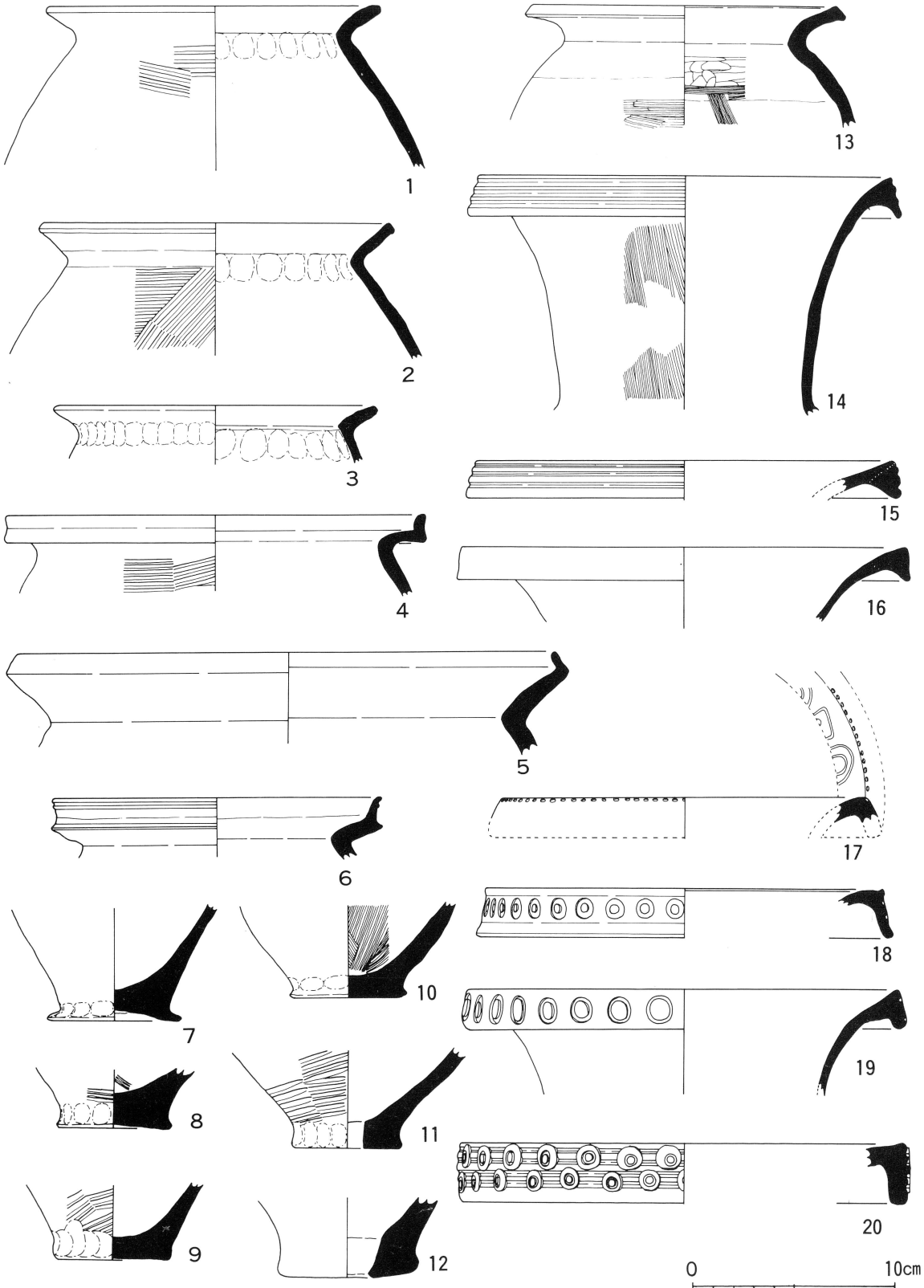
暗茶褐色砂質土（弥生時代遺物包含層）堆積範囲



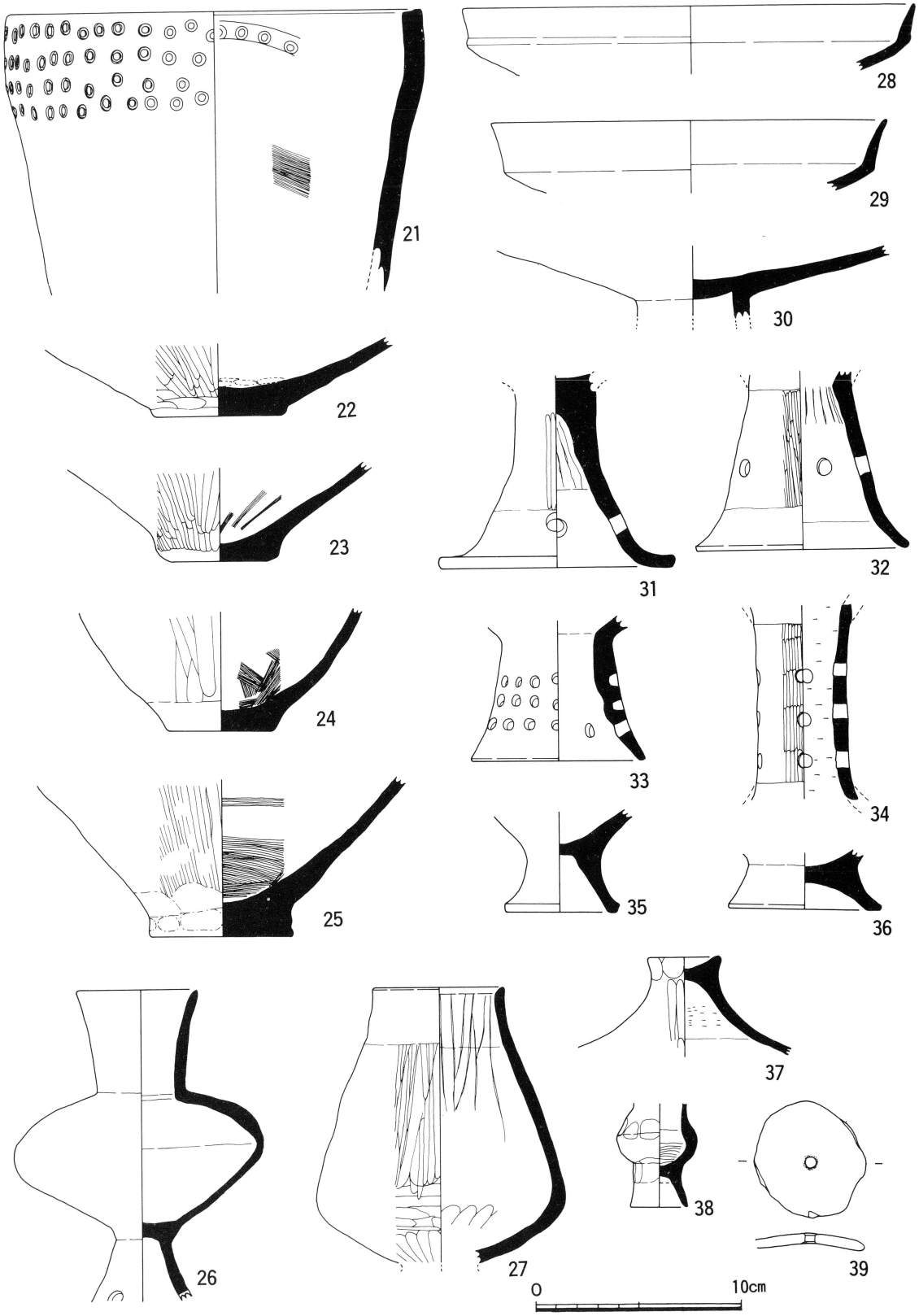
調査地区土層図

PL 3

PL 4

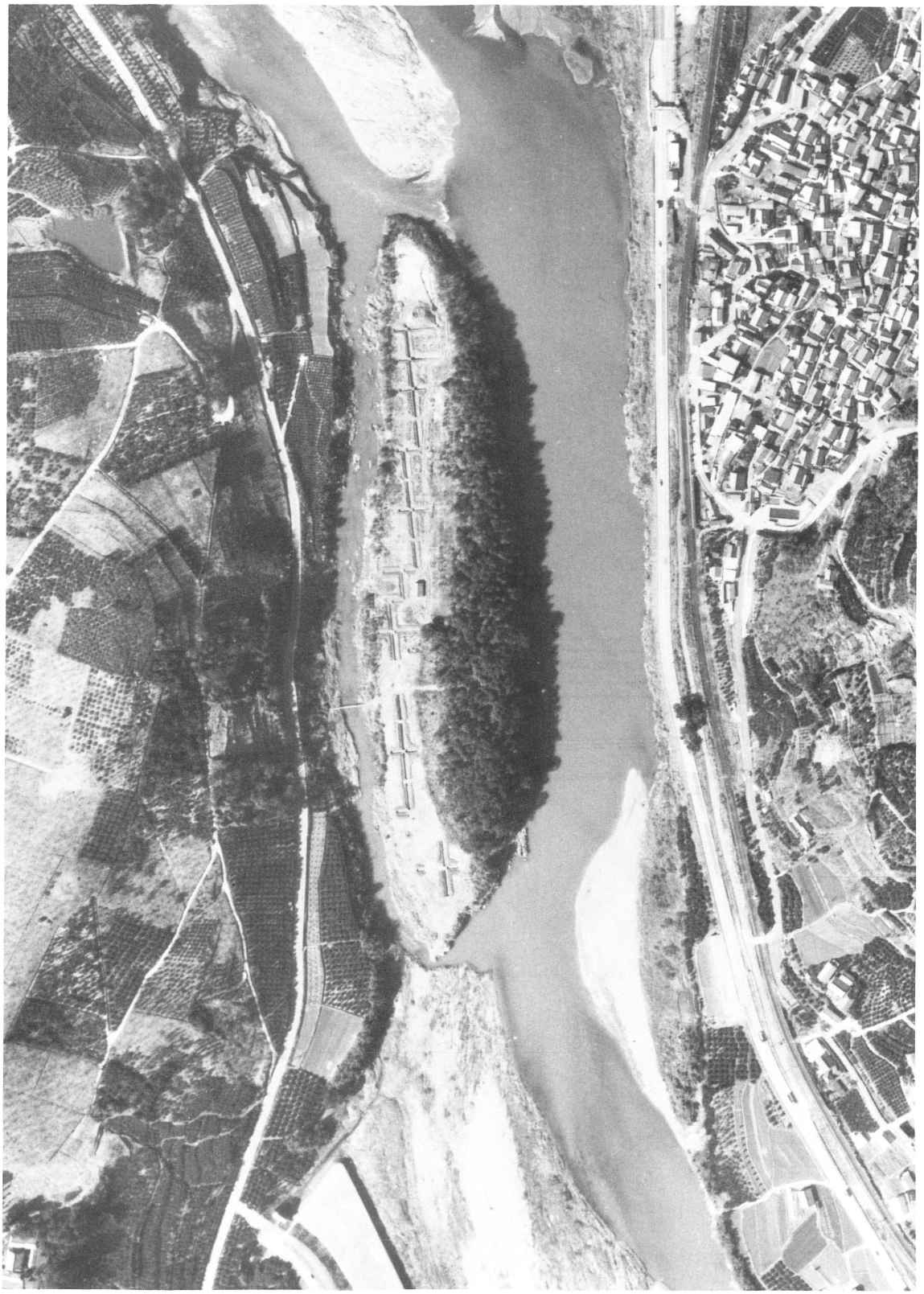


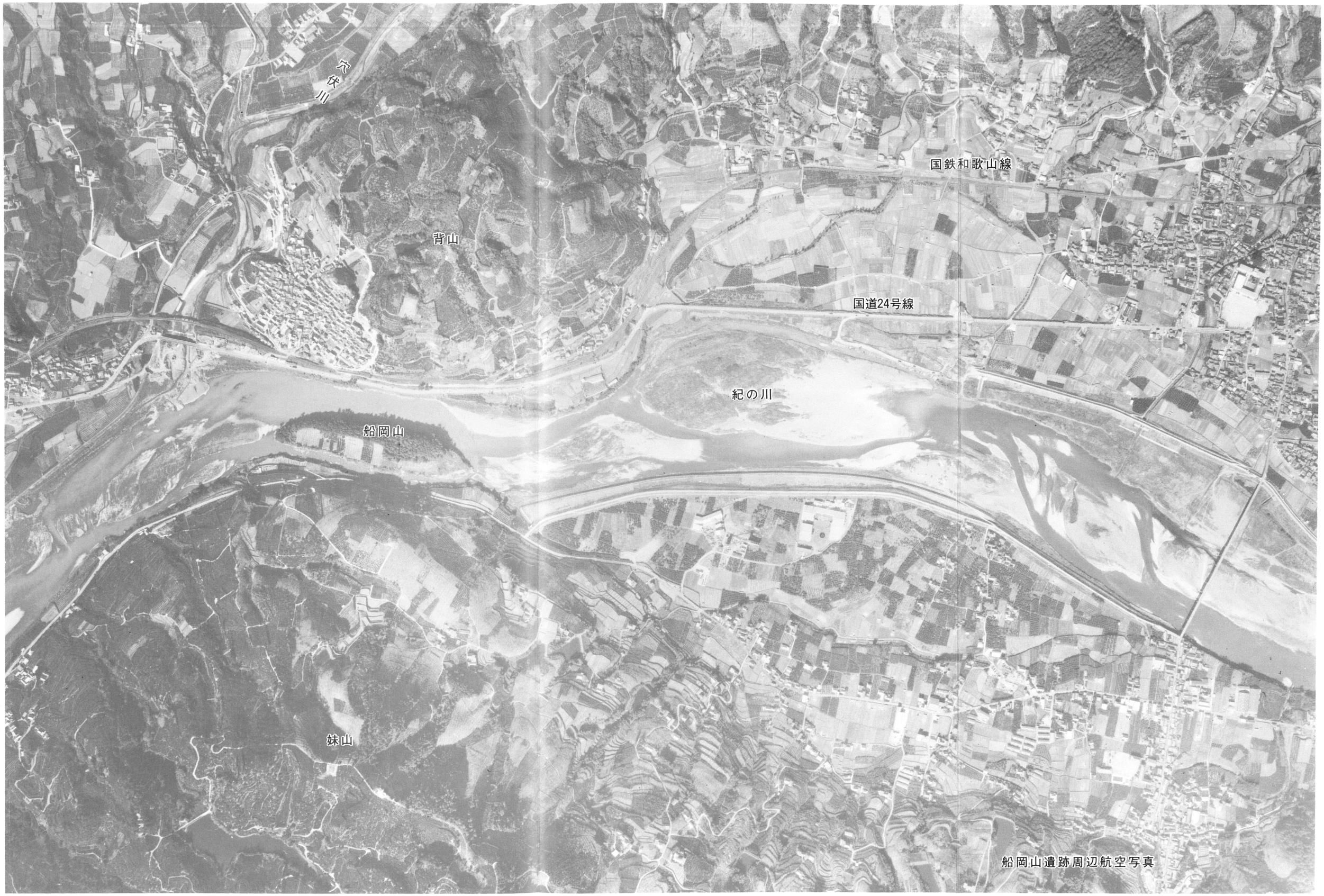
出土遺物実測図



出土遺物実測図

PL 6





船岡山遺跡周辺航空写真

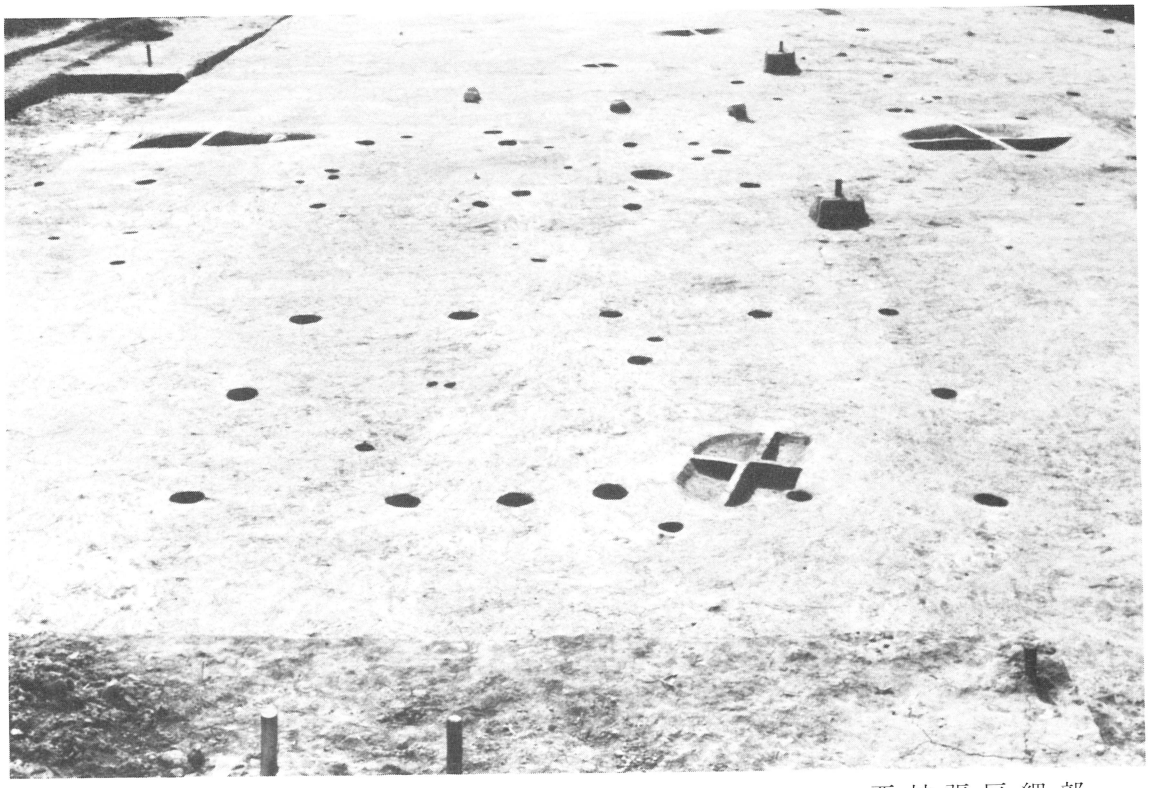
船岡山遠景（東より）

船岡山遠景（西より）

発掘調査状況

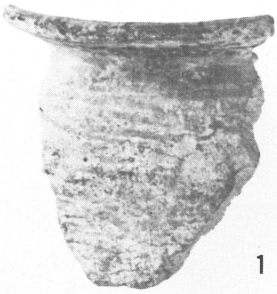
発掘調査状況

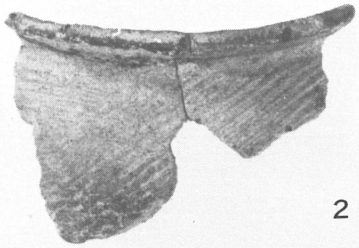
西拡張区

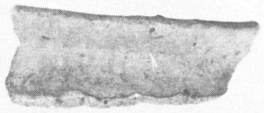


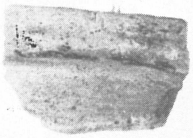
西拡張区細部

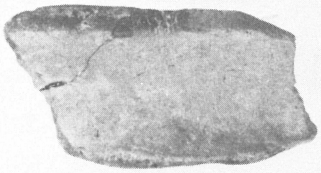
PL 11

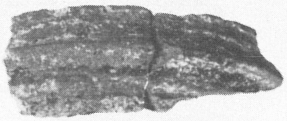

1


2


3


4

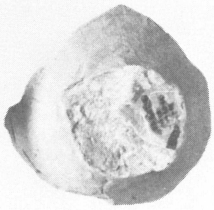

5


6

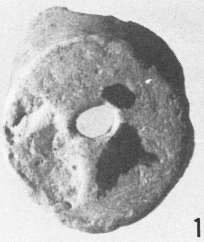
7

8

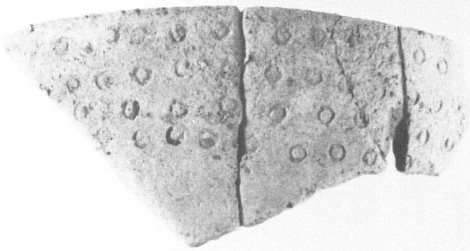
9

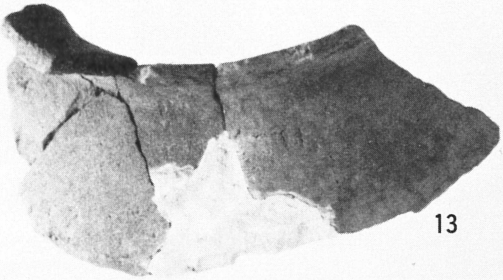

10

11

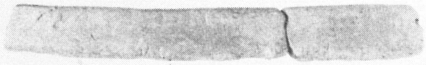

12

14


21

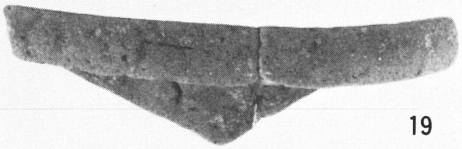

13

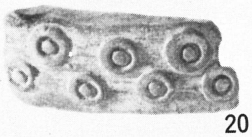
15

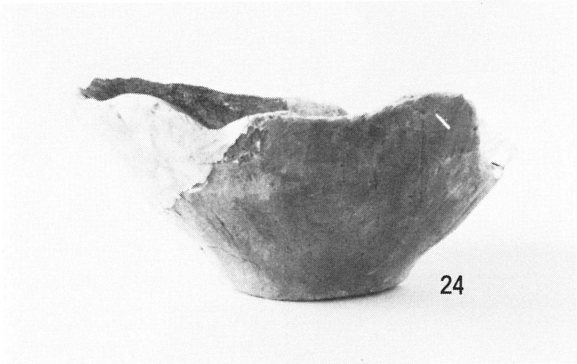

16

17

18


19


20


24

25

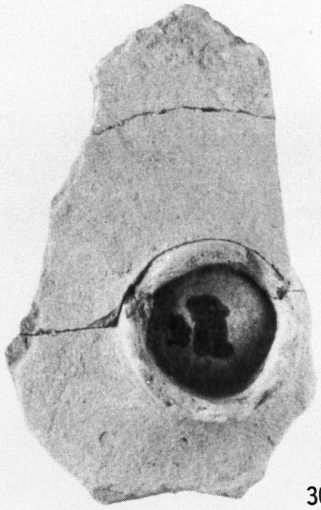
26

27

PL 13

28

29



30

37

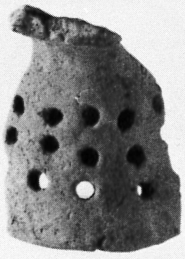
38

31

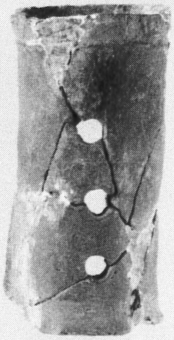
32

35

36



33



34

39

船岡山遺跡発掘調査概要

昭和55年3月

発行　和歌山県教育委員会
印刷　邦　上　印　刷